どりがひもじかよねまんぢうとうたふたり云々、當時よねまんぢうのおこなはれたるを見るべし、享保の比の板、江戸八景の繪本に、金龍山聖天に二王門ありて、ひめぢ屋といふ、よねまんぢうの店あり、近き世までも其なごりありしなるべし、○圖略

江戸鹿子、眞土山の條に、坂の登口、又聖天町の門前も左右ともに茶屋なり、此麓屋伊勢屋の饅頭は名物なりとて、よねまんぢうとよぶ云々とあれば、伊勢屋といへるもありしならん、

〔宗五大草紙上〕人の相伴する事

一點心の時參樣、○略中まんぢうのくひやう、一取てをしわりて、なからをば殘たるまんぢうの上にをきながらくふべし、さて殘たるをもくひたくばくふべし、くるしからず候、年寄たる人は、丸ながらもくふべし、又も二もくふべし、又作善の時は、僧達はさばの心にて、ちとちぎりて右のさらに取置候、いづれも點心同前に候、○略中又いにしへは椀に、まんぢう四入候樣に覺候、三ならべてわんニ入、ひとつ上に置たると覺候、定て覺違にて可有候、○略中

まんぢうのこきり物、二色一色にても不苦候、此こを汁へ可入、但入候はぬも不苦候、若き人などは、入候はぬも能候、年寄はかうのものなどを、さいのやうに、まんぢうにくひそへたるも能候、若人はめゆ〳〵有べからず、○略中

一饅頭はめし椀に入て、しる椀をふたにし候、ふたのしるわんにて、汁を可請、さてこを可入、若人などはしるをすはぬも能候、こをも不入共なり、年寄は入て能候、さてむぎのすはり候時、きうじの人盆を揃て出て、まんぢうをうつし候、其めし椀に麥の汁をうくる也、まんぢうの汁の入たる汁わんをば、配膳の人取也、○略中

一同時○一獻の時饅頭のすはり樣、そへ肴あるべし、

くひやう、こを先汁へ入べし、又入候はぬもくるしからず、若人などは何となく入らぬが能候、汁をもすひ候はぬも不苦候、年寄は何としたるもくるしからず、先まんぢうを一取てをしわりて、